
星の屑たち

穂波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星の屑たち

【Nコード】

N5454U

【作者名】

穂波

【あらすじ】

冬の空を見て想うこと。

それは君の

ベランダで空を眺める。体がきんつと冷えた。

冬は好きだ。空気に余計なものが一切無く澄んでいて、空が吸い込まれるほどに綺麗で、そこに絶対の安心を感じていた。最近、夜になる度に同じようなことを考える。きつと、あまりにも空が綺麗だから。すこまれそうな冬の空。

「陽奈、」
「……翔汰。」

いつの間にか、隣の家のベランダに幼馴染がいた。

「お前、寒くねーの？」
「厚着してなくもくないから大丈夫。」
「どっちなんだよ。」

翔汰の家はすぐ真横にあって、ベランダも少し伸ばせば手が届くほどに近い。

「久しぶりだね、ここで顔合わせるの。」
「ああ…。小学校くらいまで、ベランダ使っただけで家行き来してたっけな。」
「そうそう。スリルあっておもしろかった。すぐ見つかって怒られたけど。」

ずいぶん懐かしい話な気がするけど、そんなに昔のことじゃない

い。

めまぐるしくまわる毎日のせいだろう。

私たちを急かして、立ち止まることを許さない時間ときに嫌気がさした。

はぁ、と両手に息を吹きかけると「やっぱり寒いんじゃないか」なんて視線を感じた。

ごまかすように言葉を次ぐ。

「空、綺麗でしょ。」

「……なんだよ、いきなり、」

「いや、私がここにいる理由がこれだから。」

「……ふうん。」

翔汰が夜空を見上げる。

その姿を見てピンときた。

「あ、」

「なに？」

「……ふうん、」

気づいた。

夜空は似てるんだ、翔汰に。だから、

自分でもなんともいえない理由に頬が緩んだ。へへっと笑う。

「私、夜空好きだなあ。」

自分の中では大告白だったりする。

「ん…俺は晴れた空がいい。」

もちろんそんなこと気づかない翔汰から、先程思っていたことと、真反対ともとれる答えが返ってきて意外だった。

「へえ、なんで？」

「……お前っぽいから。」

夜空を見上げながら、さり気ない風に言う。

胸がぎゅっとなった。

ふいに視界がぼやける。この鼻の奥がツンとなる感じ、久しぶりだ。

手が暖かく包まれた。

「……手あったかいじゃん。カイロあんの？」

「心があったかいからだよ。」

「それ逆だって、たぶん。」

翔汰の手は私より大きい。

「…俺、この国出るからさ。」

「知ってるだろ、親が離婚すんの。」

「それで、父さんについてく事になったから。」

今夜は風がない。無音だ。

家の近くには大きな木がある。いつもカサカサと揺れていた。

今はそれが、ない。きこえないだけかもしれない。

初めて、風のない夜を不気味だと感じた。

握られた手にしずくが落ちる。一度流れたら、もつとまらない。

想いがあふれる。

「待ってる。」

ずっと心に秘めていた。

けど、お互いにわかった。

口に出さないだけで、誰よりもわかり合っていた。

それでいいと思えてた。

「待ってるよ、何年でも、」

「……、」

「親思いの翔汰を知ってるから止めはしない。」

「……。」

「なんと、なく分かってた、から……、」

、
声が震える。伝えたいのに震えが邪魔をする。

「でも、私に相談なしで行っちゃうんだもん。私だって、勝手に待つ。」

「……どのくらいに戻れるか分からない。」

「いいよ、」

「電話代だっけかかるから、そうしょっちゅうは掛けられない。」

「……うん。」

分かってる、大丈夫。

ふっと、翔汰が笑う。

「ひどい顔、」

「う、うるさいなあ……!」

言い返すと、しばしの沈黙が流れた。

静かになるとさつき自分が涙を見せてしまったことが恥ずかしくなってくる。

「……。」

でも、会いたいときに会えないは、つらい。
今日何度目かの空を見上げた。

「……ほんと、きれい。」

「……だな。ここから見る空って、特別な気がする。向こうって星見えるんかな。」

「どーだろうねー。」

どうなんだろう。私にも、翔汰にも、わからない。

「まあここは見えるから。しかも絶景っ!」

手を離してばんざいのポーズをとった。
星をつかまえる。

「じゃあ、楽しみにしとくか。帰ってくるのを。」
「うん。」

あの星たちを、宇宙の屑だなんていえない。

もしそうならば、私は……私たちは星の屑だ。

そう言ったら、「星の屑の意味ってそうゆうなの？」と聞かれた。
そんなこと、知らない。

「ううゝ寒いね。」

「戻るか、」

「うん。」

手を振ってそれぞれの部屋に入る。

明日もここに来てみよう。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5454u/>

星の屑たち

2011年10月9日06時04分発行